第 2 章　鉄道趣味の分類

鉄道趣味には「乗車」「撮影」「車輌研究」「収集」「模型」「マルチメディア」「考古学・史学「廃線・未成線探訪」「鉄道資料・規則研究」「鉄道グルメ研究」などといった分野がある。この章ではそのような分野を順に解説してゆく。なお、鉄道趣味の歴史については第 1 章、鉄道ファンの様子については第 2 部・第 3 部の各章を適宜参照されたい。

1.乗車

鉄道の本源的需要である鉄道旅行を趣味とすることを指す。

比較的行いやすい分野と言える。恐らく鉄道を趣味とする者の大多数はこの分野に入るものと思われる。そしてこの分野に傾倒する者はおもに「乗り鉄」と呼称される。

「乗り鉄」の歴史は長く、その先駆者として内田百閒が挙げられる。彼は 1952 年に随筆「阿房列車」を記し、自身が「無用の汽車旅」として、特に用事もないのに東京から大阪間を往復した模様を綴った（『阿房列車』所収、「特別阿房列車」）。

内田百閒の後、1978 年に宮脇俊三が『時刻表 2 万キロ』を記した。同書には、彼が中央公論社のサラリーマン時代に、当時の国鉄路線を全て乗りきった(これを完乗という)旅の様子が描かれている。本書が世に出て評価されたことにより、従来は評価の対象とならなかった完乗が評価される契機となった。

2 年後の 1980 年 3 月、国鉄が「いい旅チャレンジ 20000㎞」[1]キャンペーンを企画。多くの完乗者を生むこととなった。また、近年では鉄道旅行を扱った書籍、雑誌やテレビ番組も多く、団塊世代や女性などそれまで鉄道趣味に関わりを持たなかったような層が、鉄道旅行を積極的に行なうようになっている。

---

[1] 国鉄の全線完乗を目的とするキャンペーン。乗車線区の数に応じて段階的に設定される表彰制度が存在し、条件を満たすと景品がもらえた。1980 年から、分割民営化後の 1990 年まで実施された。

では、乗車の目的にはどのようなものがあるのだろうか。まず挙げられるのは、先述した完乗である。完乗達成の喜びは大きい。しかし、完乗した後に、新線が開通すると、また開通した新線に乗車しなければ完乗したことにはならないので具体的な時点での完乗を目指すものもいる。

これら一連の、完乗を目的とした乗車は「乗りつぶし」と呼称される。

またこれに似たような目的として、全ての駅で降りるというものもある。JR・私鉄全駅乗下車は、2005年に横見裕彦氏が上信電鉄上州福島駅にて達成している。こちらは「乗ったで降りたで」とも呼ばれる。

他の目的として、車窓風景を楽しむことが挙げられる。列車の側面から観た車窓風景はもちろん、列車の前後で運転士や車掌の目線で見た車窓風景も対象となる。このように、車窓風景を楽しむためにパノラマ式の全面窓を設けたり横窓を広くしたり、さらには壁を取り払って車窓風景を窓を介さず直に楽しむことのできる車輌も数多く走っている。また特定の車窓を楽しむツアー旅行なども数多く企画されている。

2.撮影

鉄道車輌や車窓、さらには駅舎といった鉄道に関する様々な設備を写真撮影することを指す。この分野に当てはまる者は「撮り鉄」と呼称される。以下、鉄道車輌撮影者を主として説明する。

撮影の目的は様々で、写真の鑑賞や雑誌類などへの投稿、さらには車輌模型やジオラマ製作の参考などである。撮影の対象となる車輌は一般列車はもちろん、臨時列車や遭遇率の低い車輌など多岐にわたる。

また写真のスタイルも様々であり、鉄道車輌を正面から撮影するスタイルや車輌と風景を合わせて一枚の風景画のように撮影するスタイル、さらには車内外の形式プレートなど車輌の特定部位を撮影するスタイルや撮影した車輌等に自分の気持ちを投影してパソコン上でぼかしなどのエフェクトを加えて一つの芸術作品に仕上げるスタイルもある。

では、写真撮影の基本的な流れを辿ってみよう。

車輌を撮影するにあたって、最初に行なうのは撮影車輌の選定である。そして、重視されるのは撮影場所の選択である。これらの情報を獲得するには、撮影地・臨時列車情報などの情報が掲載されている雑誌類・地図の購入、仲間・友人から情報を取得、そしてインターネットの情報サイトを閲覧する。

撮影場所は駅のホーム、線路脇、跨線橋、車輌の特定部位を撮影する場合は車輌の内部や外部など様々である。

使用するカメラは、従来フィルム式一眼レフカメラが主流であった。しかし、近年ではデジタルカメラも普及しつつあり、また携帯電話に搭載されているカメラを使用する者もいる。つまり、いかなる形状のカメラも使用される。

撮影した写真は、先述のとおり雑誌に投稿したり、ホームページや掲示板に掲載したり、個人・サークルで鑑賞して楽しむのである。

3.車輌研究

「車輌研究」とは、全国の鉄道路線には数多くの車輌が走っている。そうした日本全国、ひいては世界の鉄道車輌を研究する分野である。

車輌研究の切り口は様々である。例えば、車輌の内外のデザインを研究する者もいれば、最高速度や最大定員といった車輌スペック、車輌形式の歴史的系譜や車輌形式記号、さらにはパンタグラフ・クーラー・座席といった、鉄道車輌に搭載されている機器類の形状、機能を研究することなど、多数挙げることができる。

また、研究の対象となる車輌も様々である。一般の旅客車輌はもちろん貨物車輌、ジョイフルトレインなどの臨時車輌、さらには軌道保全車といった事業用車輌など多岐に渡る。

さらにこの分野においては TGV(フランスの高速列車)やユーロスター(ドーバー海峡に設けられたユーロトンネルを走る高速列車)といった日本国外の鉄道車輌も研究の対象となる。比較的、乗車などに対して海外に興味をもつファンが多いのも特徴の一つである。

鉄道に興味をもった者には幼少期に鉄道車輌に惹かれた者も多い。となると、この「車輌研究」は、幼児から成人までほぼすべての年齢層の鉄道を趣味とする者が属している分野ともいえる。また先述した鉄道撮影との関連性も比較的強い。

近年では廃車・引退となる鉄道車輌を駅のホームなどで見送ったり、実際に乗車したりして、感傷に浸る習慣も浸透している。これは、リバイバルブームの影響もあるが、JR 中央快速線の 201 系など長年活躍してきた鉄道車輌が引退の時期を迎えていることもこういった習慣が浸透した一因といえるだろう。

4.収集

駅名板や車内の停車駅案内図といった実際の鉄道施設において使用された備品、機関車・車輌のナンバープレート、使用済みの切符や磁気カード、さらには鉄道記念グッズといった鉄道に関するものを収集することを目的とすることである。この分類に該当する者は「収集鉄」と呼ばれることが多い。

収集の対象物は、鉄道用品専門店などで手に入ることが多いが、日比谷公園で毎年 10 月 14 日前後に開かれる「鉄道フェスティバル」や各鉄道会社が行うイベント（たとえば車輌基地の一般公開）などでも入手可能である。また、インターネットの普及もあってそういった商品を取り扱うショッピングサイトも数多く存在し、いつでもどこでも入手可能といえる。

収集鉄の中には、廃車となった車輌などを譲り受けてそのまま展示したり、店舗などとして使用したりする者もいる。

一方で、公園などに展示してある鉄道車輌の備品や廃線跡のレールなどの盗難事件も発生している。一例として、2006 年 5 月 12 日に北海道白糠町において旧国鉄白糠線の廃線跡のレール約 40 本が盗まれたことがある。なおこの事件は現在も未解決である。こうした事件は必ずしも鉄道愛好家が関与しているわけではないが、明らかに鉄道ファンの犯行と思われる盗難事件も起きている。鉄道ファン以前に、良識ある人間としての自省を求めたい。

5.模型

図 1-2-1　N ゲージの車輌

本物の鉄道車輌を適切な尺度に縮小し（一部、デフォルメしている場合もある)、家庭用電流によって走行可能な鉄道模型を運転したり、コレクションしたり、さらには走らせるための線路を備えたレイアウトやジオラマを制作することを言う。さまざまな縮尺が存在するが、日本において主流なのはＮゲージと呼ばれるサイズである。

名称	基本縮尺(スケール)	線路幅(ゲージ)
１番	1/32	45㎜
0	1/48	32㎜
S	1/64	24㎜
HO	1/87　※日本型は 1/80	16.5㎜
TT	1/120	12㎜
N	1/160　※日本型は 1/150	9㎜
Z	1/220	6.5㎜
ZZ	1/300	4.8㎜
T	1/450	3㎜

表 1-2-2　主なゲージの種類　このほかにも様々なゲージがある。

一口に鉄道模型といっても車輌はもちろんのことレールや車輌に電流を送るコントローラー、さらにはストラクチャーと呼ばれる建築模型類や木の模型や草などを表現するパウダーといった景観模型制作に用いるシナリ―用品など様々な要素から構成されている。しかし初心者のために車輌、レール、コントローラー類をひとまとまりにした入門セットも数多く発売されているため、この分野は比較的始めやすい。

一方で、「鉄道模型」の参入には欠点がある。まず、経済的負担が大きいということである。これは車輌類やストラクチャー類に精密部品が数多く盛り込まれているためである。そのためか「趣味の王様」とも呼ばれる鉄道模型は「金持ちの趣味・道楽」などという印象も持たれやすい。

つぎに、空間的負担が大きい。比較的小型の N ゲージでも 16 両編成の新幹線を走らせようとするものならば、少なくとも畳 3 畳分のスペースが必要である。そのため、自宅や自分の部屋などで鉄道模型を走らせ、レイアウトを制作しようとすると、相応のスペースが必要となる。

近年の住宅事情を反映して、鉄道模型店が、客が持参した車輌などを走らせることができるレンタルレイアウトを備えることも増えている。また小型レイアウトの製作方法も、鉄道模型誌上で数多く紹介されているため空間的な問題は改善の傾向が見られる。

6.マルチメディア

鉄道を取り扱った書籍、テレビ番組、DVD などの鑑賞のことを指す。鉄道を取り扱った書籍は様々あるが中でも『鉄道ファン』『鉄道ピクトリアル』『鉄道ジャーナル』は三大鉄道雑誌と呼ばれ、数多くの鉄道愛好家に読まれている。

またこの後第 3 章第 1 節や第 2 節で取り上げる、宮脇俊三などが記した鉄道紀行文、川島令三氏などが記した鉄道批評本、新線計画論といった書籍も人気が高い。

鉄道を取り扱った DVD としては列車の全面展望を録画したものが中心である。

鉄道を取り扱ったテレビ番組の代表格として、NHK 衛星放送で放送中の「にほん木造駅舎の旅」、テレビ朝日系列で放送中の「世界の車窓から」などがある。これらは長く続く人気番組である。他にも旅番組やバラエティ番組などで鉄道特集が組まれることも多い。

さらに列車の走行音、モーター音、駅の放送など鉄道の音を楽しむ習慣も定着しつつある。鉄道車輌のモーター制御音もメーカーや制御方式によって大きく差があり、いわゆる「違い」を楽しむ者も少なくない。中には、そうした鉄道車輌のモーター音をその車輌の模型で再現したり駅の発車メロディを楽器で演奏する者もいる。現に JR 東日本の駅構内で流れている発車メロディの楽譜として『鉄のバイエル』（松澤健、ダイヤモンド社、2008）が出版された。

モーター音や発車メロディ、自動放送などはボイスレコーダーなどを使って気軽に録音可能であるし、そうした音を収録した CD も数多く発売されている。ただ、録音した駅の発車メロディを無断で他者に公開することは著作権法違反にあたるので注意したい。

7.考古学・史学

考古学・史学とは、古い鉄道施設や車輌、さらには特定の鉄道路線の歴

史や由来、後年の鉄道に対する影響などの研究を行うことである。

研究対象や方法は様々あるが、列車や駅、電車の歴史を辿るものが多い。片野正巳・赤井哲朗の『陸蒸気からひかりまで』（機芸出版社、1965）、星晃『回想の旅客車　特ロ・ハネ・こだまの時代』（交友社、1985）、池田邦彦『列車紳士録』（ネコ・パブリッシング、2004）など、鉄道の歴史を巡る文献や書籍は現在も多数発行されている。さらに、旧信越本線横川～軽井沢間に存在するめがね橋（碓井第 3 橋梁）や各種駅舎なども研究の対象とされている。

こうした鉄道の歴史を研究する組織として、鉄道史学会があり、学会誌『鉄道史学』の発行など、活発な活動を行っている。

鉄道は地域の歴史、ひいては世界の歴史に強い関連性があり、それ自体が歴史の１ページとして刻まれることも多々ある。例えば、高度経済成長期、東京オリンピックに併せて東海道新幹線が開通。石炭から石油へのエネルギー革命がおこり、石炭で走っていた蒸気機関車は次々と姿を消した。

こうしてみると、鉄道に関する設備の歴史的由来を研究することは我々人類の歴史を再認識することにつながるのだろう。

8.廃線・未成線探訪

図 1-2-3　幌内線廃線跡

この鉄道趣味は、利用客の減少などで廃線を迎えた路線、資金不足や収

支見込から、未完成に終わった路線の遺構の探索することである。上記の「考古学・史学」から派生した。

廃線・未成線探訪を体系づけた第 1 人者はやはり宮脇俊三である。彼は 1995 年に書籍『鉄道廃線跡を歩く』を編み、廃線・未成線探訪を一般化するきっかけを作った。

近年、探索に適した廃線・未成線跡を紹介する書籍や廃線・未成線散策を盛り込んだツアーの実施、遺構を遊歩道などとして活用する自治体あらわれたことで、以前よりも容易かつ安全に探索することが可能になったと言える。また、鉄道ファンがそうした廃線・未成線の魅力を伝えようとする動きも各地で出ている。一例として、2010 年 10 月 10・11 日、秋田県鹿角郡小坂町において、2009 年 4 月に廃線となった小坂精練小坂鉄道の魅力を伝えようと、鉄道ファンが実行委員となって旧駅舎や車輌などの公開を行った。

探訪・探索の手法として、書籍などを用いて学術的に研究する方法と、サイクリングロードや遊歩道となった廃線・未成線跡を実際に散策する方法、更には自動車などで「それらしい」旧跡を訪ねることもある。

では、現代の鉄道が大きな関心を呼んでいる一方、なぜ人は廃線・未成線に惹かれるのだろうか。そこには、探訪・探索の面白さはもちろん、発見の喜び、想像という夢を追う行為が隠されているのではないかと思われる。風化した遺構を苦労して探し当てた時の達成感はまた格別なものであろう。そして、遺構が路線として機能していた時、そこにはどのような情景が広がっていたのだろう。未完に終わったこの路線が完成すれば、どのような車輌が走ったのであろうか。そうしたとりとめもない思いに身を浸すことが、この「廃線・未成線探訪」の醍醐味である。

9.資料・交通規則

鉄道は運賃などを定めた旅客営業規則、鉄道事業法などといった法律類や様々な規則の下で成り立っている。

「資料・交通規則」を取り扱う鉄道趣味とは、営業規則や各種法律など、鉄道を成り立たせる規則や新線計画図などの資料を研究する分野である。

一例を示そう。例えば、JR 各社は並走する競合他社路線が存在する区間には、対抗のためもあって、従来の運賃計算体系を適用するのではなく若干割安な区間特定運賃を制定している場合がある。他にも、空港線など新

たにできた路線には加算運賃が定められ、JR の会社をまたがって乗車する場合には割増金が加算されることもある。このように複雑な運賃体系の問題点を指摘し、解決策を模索するといった研究がある。

また、鉄道資料も図書資料、新線計画図やダイヤグラム表など様々ある。

数ある鉄道資料の中でも一番研究の的となるのは新線計画であろう。新線計画図研究の第 1 人者として第 3 章第 2 節でも取り上げる川島令三氏がいる。彼はこれまで数々の新線計画に関する書籍を執筆している。その中には国土交通省の新線計画に対する批評や、自分なりの新線計画、更には新線計画を踏まえたダイヤ改善案などが描かれている。

また、自分なりに新線を計画することを趣味とする者も多く、計画のある新線を紹介するホームページや、パソコン上で新線の地図を作製できるツールも数多く制作されている。

この新線計画も、廃線・未成線探訪と同様に想像力を必要とし、その点で単なる妄想にとどまらない魅力があると言ってもよい。

10.鉄道グルメ

図 1-2-4　駅弁

「鉄道グルメ」、それは駅弁や駅そばなどの各種鉄道グルメを実際に足を運び、食べて眺めて楽しむことである。

数ある鉄道グルメの中でも、一番人気があるのは駅弁である。そもそも駅弁とは、社団法人日本鉄道構内営業中央会に加盟している加盟業者が製

造し、駅や列車内で販売している弁当類のことを指す。製造業者がこの組織に加盟しているかどうかは、弁当の掛け紙（包み紙）やパッケージ等に組織が制定した「駅弁マーク」があるかどうかで判断できる。つまりこのマークがないものは「駅弁」とはみなされないのである。

駅弁業者は地域の産物や特色を生かした弁当づくりを推進し客のニーズに合わせた保温式弁当やキャラクター弁当の発売など数々の工夫を凝らしている。またそれまで一部の老舗百貨店が正月などの限られた時期に行ってきた駅弁大会を全国のスーパーが客寄せのために盛んに開くようになり駅での販売不振が続いている業者が巻き返しを図って出店するということも多い。さらには特定の駅弁を食べるためにわざわざその駅弁を販売している駅まで、列車を乗り継いでいく者もいる。現在、空港で売られる「空弁」、高速道路のサービスエリアで売られる「速弁」など、駅弁と同じような販売形態で売られる弁当類も多数ある。そうした意味で、駅弁は時代を先取りしたグルメであったのだ。

また、鉄道グルメの代表格として駅そば類も忘れてはならない。駅そば類とはその名の通り各駅の特定ブースにおいて提供されているそばやラーメンなどの麺類を指す。地域により、だしや麺の種類、製法などが異なっており、鉄道という地域に根ざした乗り物の情緒を味わえるものが多い。

鉄道グルメの変り種として、千葉県銚子市の銚子電気鉄道が製造販売するぬれ煎餅がある。会社の窮状を訴えるメッセージと共に、ぬれ煎餅の購入をお願いするメッセージが掲載されて話題になり、現在は全国区の人気商品となっている。

11.その他

これまで挙げてきた分野の他に、信号機やATC(自動列車制御装置。運転士の視認・操作によらず自動的に列車速度を制限する装置)そしてATO(自動列車運転システム。運転士の関与なく自動で発車から停車までの一連の運転操作を行う装置)といった、列車の円滑な運行に欠かせない技術を研究する「技術鉄」と呼ばれる分野や、鉄道の運用・運行状況について観察する分野、さらには「電車でGO!」や「Train Simulator」といった鉄道を扱ったゲームソフトをプレイして楽しむ分野もある。

以上のように、鉄道趣味を分類してきたが、これ以外の部類もまだたく

さんある。かつて、鉄道趣味といえば、乗車や模型といったものが定番であった。しかし、最近ではそれに留まらず、他の趣味や他の部類と深い関連性のある分野の趣味が増加しているように思える。またテレビやインターネットなどの情報媒体の発達も、こうした鉄道趣味の細分化に拍車をかけている。

鉄道趣味は、今後も様々な領域に広がり、多くの鉄道ファンによって楽しまれることだろう。